

成人障害者の 24 年間の生活記録にみる発達的变化

張 貞 京

A Mental Retarded Adult's Developmental Changes through the Life
Documents in 24 Years

CHANG Jeongkyong

問 題

1980 年以降、ノーマライゼーションの理念が普及し、障害者の地域社会における参加、自立生活を実現するために、障害者関連の施設の流れは通所施設やグループホームのような小規模、地域志向タイプが注目されてきた。これは既存の居住型生活施設¹⁾（以下、生活施設）の限界と言われる行動の制約、管理などについての問題を解消していると評価される。しかし、地域内で生活しているから自立し、地域社会に参加できたと言えるのではない。発達に障害をもつ場合、地域への参加や自立のためには、参加できる機会やそれを支える人間関係を用意し、生活を援助しつつ、生活の主体となれるよう促していくことが求められるだろう。

グループホームの生活についての報告の中で、戸田（1994）は利用者の生活を満喫している姿は、生活施設で獲得した生活力がもたらしているとし、生活援助の仕方について生活施設の実践より学ぶところは多いとしている。戸田は生活力につながるものとして生活技術の獲得をあげているが、生活技術に限って考えても、ただその場にいるからではなく、適切な援助、指導があってこそ、獲得が可能であろう。それは生活を援助指導する指導員らによる働きかけによるものでもあるが、生活の時空間を共にする仲間との間で援助され、育っていくものでもある。生活指導の実践から得られた視点をまとめた近藤（1989）によると、生活を彩り規定するものは人間関係—集団であるとし、生活作りは集団作りに連動するとされる。生活援助、指導のあり方への吟味は、集団における仲間関係を基本とする他者との関係についての考察が求められるだろう。

生活施設の入所者については、加齢による変化が注目され、秦（1995）の研究のように、その変化に対応する生活援助、指導の課題が模索検討されている。また、三谷ら（1992）は高齢の障害者に対して、生活の質についての面接調査を行い、彼らが諸活動への積極的な意味を見い出しているのは、彼らの人間的成長を見守り、生き方を示す存在が身近にいたからと考察している。しかし、これらの研究は機能的な老化に注目していたり、それまでどのように変化してこれ、どのように変化していくのかについての生涯にわたる長期的な視点が欠けている。成人障害者の変化は乳幼児のように、何ヶ月、何年の短いスパンでその発達をとらえることが困難な場合が多

く、長期的な視点によって、はじめて加齢の影響について考察する手がかりを得ることができる。

そこで、毎日生活の中で観察された事が記録される生活日誌に着目してみた。発達的な変化をとらえた日誌研究は、やまだ（1987）の研究に代表されるように、乳幼児の発達についての身近な観察者による研究が多く、障害をもつ幼児の場合については、松田（2000）の研究のように療育日誌を用いたものがある。前者は一定の視点で観察記録されたもので、対象となる発達領域についての研究対象として、その有効性が支持されている。また、後者の療育記録は全体的な発達をとらえ、療育内容についての示唆を与えるものである。

それに比して、成人障害者についての日誌研究は皆無に近いが、長谷川ら（2000）は更生施設の生活指導員によって記録された10年間の日誌を分析し、入所者の介助度の加齢的变化についての評価を試みている。その中で、日誌は入所されている間、記録され続けているため、長期にわたるデータが収集可能であること、複数の記録者間のちがいは長期でみると、平均化できると示している。また、長期の日誌分析の方法を用いることによって、介助度の変化だけでなく、生活史をあわせて検討すれば加齢の様相を明らかにすることが期待できるとしている。

上記のことから、生活施設入所者である成人障害者の長期にわたる日誌を用いることは、日常生活の中で育てられていく多様な他者との関係を発達のとらえる際に有効であると考えられる。ただし、どの施設の日誌を分析しても同じようなものが読み取れるとは考えにくい。各々の施設はその歴史的な背景や理念が異なり、入所者をとらえる視点にも違いが現われるだろう。

そのため本稿では、設立当初から、他者との関係を促す集団作りを生活指導の基本柱の一つにしているA・M寮の日誌を用い、筆者（1993）がタイムスタディ研究の際、観察記録した対象者の1人について、分析考察を行う。本研究はタイムスタディの時点において、積極的に集団生活の中で行動している姿が観察された対象者のそれまでの変化を、日誌の中からよみとっていくことによって、第一に、生活の主体となる自立生活へと導くための生活援助、指導上の手がかりとなる他者との関係の変化、第二に、生活指導への示唆点、第三に、長期的な変化過程をとらえる生活記録分析の有効性について明らかにすることを目的とする。

対象と方法

1 対象者のプロフィール

A・M寮（居住型の知的障害者更生、授産施設）に在籍する成人女性のTさんである。1950年に生まれ、特記された既往歴はない。6歳で入寮するが、年齢が幼く、周りの状況変化についていけないと判断され、9歳時に児童施設へ移籍する。その後、16歳の時に、A・M寮の生活に適應できると判断され再入寮した。再入寮時、日常生活の基本的な動作は自立していたが、話し言葉の数は少なく、反響言語のような発話が多かった²⁾。筆者（1993）の研究では、日常的な身辺のことが独りででき、決まった生活のながれに沿って積極的に行動する姿が観察記録されている。

2 分析資料と分析方法

A・M寮は作業場と生活場が同じ敷地内にある生活施設で、それぞれ作業指導員と生活指導員が援助、指導を行っている。生活指導員は入所している仲間の生活全般に関わり、毎日の特記す

べき事項について記録を行っている。本稿では生活指導員（以下、記録者）によって書かれた A・M 寮の 24 年分の生活記録を分析資料とする³⁾。それは生活している入所者全員について、特記すべき事柄や病気などを観察した記録者が個人ことに書き、勤務交代などでその場にいなかった指導員への伝達事項としても活用されていた。その中から T さんに関する生活記録をすべてとりだし、時系列にカード化し、エピソードをよみとった。

T さんが再入寮した 16 歳（1966 年）から 18 歳（1968 年）までについては、入寮者全員の記録が紛失されたため、19 歳（1969 年）からの記録を用いた。その生活記録は今も続けられているが、本稿では筆者がタイムスタディを行った 44 歳（1994 年）の 3 月分までを分析資料とする。

分析に際して、日誌の内容が対象者の発達の变化をとらえるのに、適切であるかを量的な変化から読み取り、それぞれのエピソードの内容に注目した。第一に、生活の流れに沿った区切り場面の行動の切り替えに関するエピソードである。これは食堂への移動のような生活場面の区切りにおいて、最も他者とのかかわりが多く見られると考えられるためである。第二に、その他の場面にみられる指導員と他の仲間とのかかわりに関するエピソード、および、感情を表わした行動に関するエピソードである。これは生活していくなかで、他者との関係をどのように形成していたのかを把握するためである。

結 果

1 エピソードの量的変化

1) 行動記述数

複数の記録者による生活日誌を対象にし、対象者の発達の变化をとらえようとしているために、日誌の中にどのような項目、程度のものが記録されているのかを分類し、表 1 に示した。分類した基準は対象者の生活中的の①日常的な行動に関するもの、②外出、③原因や経過が明らかで診断名のつく病い、④家族関係、⑤その他、内容上分類できないものに分け、その記録数を把握してみた。42 歳（1992 年）頃になると、日常的な行動に関する記録が減り始め、50% 前後になっているが、それ以前は 70% 以上の年がほとんどである。日誌の性格上、対象者の行動をとらえ、その変化や問題点に着目していたことが、この数字からよみとることができる。

2) 行動内容の量的な変化

まず、行動に関するエピソードのみ、抽出し、停滞行動と活動的行動に分類した。ここでは集団生活における行動の表面的な要素に着目し、その量的な変化をとらえる。一つのエピソードの

表 1 エピソード総数

	19歳 (1969年)	20歳 (1970年)	21歳 (1971年)	22歳 (1972年)	23歳 (1973年)	24歳 (1974年)	25歳 (1975年)
行動記録	3 (100)*	4 (100)	1 (100)	14 (100)	37 (94.8)	19 (90.4)	32 (100)
外出関連	0	0	0	0	0	0	0
身体的な病気	0	0	0	0	0	0	0
家族関係	0	0	0	0	0	1	0
その他	0	0	0	0	2	1	0
エピソード総数	3 (100)	4 (100)	1 (100)	14 (100)	39 (100)	21 (100)	32 (100)

張：成人障害者の24年間の生活記録にみる発達の変化

	26歳(1976年)	27歳(1977年)	28歳(1978年)	29歳(1979年)	30歳(1980年)	31歳(1981年)	32歳(1982年)
行動記録	48 (92.3)	29 (90.6)	32 (100)	20 (83.3)	20 (83.3)	10 (62.5)	20 (86.9)
外出関連	0	0	0	1	2	1	0
身体的な病気	1	0	0	2	1	2	1
家族関係	0	0	0	0	0	2	1
その他	3	3	0	1	1	1	1
エピソード総数	52 (100)	32 (100)	32 (100)	24 (100)	24 (100)	16 (100)	23 (100)

	33歳(1983年)	34歳(1984年)	35歳(1985年)	36歳(1986年)	37歳(1987年)	38歳(1988年)	39歳(1989年)
行動記録	46 (90.1)	38 (86.3)	52 (88.1)	75 (90.3)	70 (81.3)	39 (62.9)	93 (76.8)
外出関連	0	1	0	1	0	3	2
身体的な病気	0	3	5	0	1	6	11
家族関係	0	0	0	0	4	3	4
その他	5	2	2	7	11	11	11
エピソード総数	51 (100)	44 (100)	59 (100)	83 (100)	86 (100)	62 (100)	121 (100)

	40歳(1990年)	41歳(1991年)	42歳(1992年)	43歳(1993年)	44歳(1994年)
行動記録	81 (81)	47 (63.5)	39 (46.4)	35 (51.4)	5 (26.3)
外出関連	4	8	16	10	3
身体的な病気	4	5	3	7	7
家族関係	4	4	9	5	0
その他	7	10	17	11	4
エピソード総数	100 (100)	74 (100)	84 (100)	68 (100)	19 (100)

* () 内は%

なかに含まれる複数の項目は、それぞれ項目別に分類しているため、行動数は延べ数で示した。行動の分類基準は、停滞行動の場合、①生活の区切りで行動が切り替えられず、立ち止まる ②泣く ③出てこない ④遅れてくる ⑤他者に対する攻撃的な行動 ⑥怒るの項目である。

活動的行動の場合は、①生活のながれにそった行動(日課の区切りに自ら行動する、当番など) ②他者のための行動(手伝い) ③他者への働きかけと思われる行動(教える、人を真似る、世話するなど) ④停滞行動みせた後、他者からの声かけで切り替えられるの項目である。停滞行動と活動的行動の具体的な例について、表2に示した。また、それに伴う自発語を取りだし、それぞれの行動の変化を考察する手がかりとした。

また、これらの行動のどちらにも属しないが、その中間的な行動として気持ちの立て直しや対人的な関係を改善すべく、現われる行動として考え、①要求、訴え、②病因が明らかでない体調不良の項目についても分類してとりだしてみた。その結果を図1に示した。

表2 行動分類の基準

停 滞 行 動		活 動 的 行 動	
内 容	具体的な例	内 容	具体的な例
生活の区切りで行動が止まる	〈1973. 5. 14〉昼食時、水道から先、動かない…	生活の区切りに自ら行動	〈1973. 6. 8〉…それがすむと、声をかけなくても掃除にとりかかる。
泣く	〈1972. 10. 8〉就寝の時、大声で泣き叫ぶがその原因がわからない…	他者のための行動	〈1984. 8. 9〉…洗濯していると自分から手伝ってくれる。
出てこない、遅れてくる	〈1979. 9. 27〉夕食、友の会にも参加せず、食べず。…	他者への働きかけと思われる行動	〈1985. 4. 30〉夕方、「コレヤッテ」と随分前にけがした指のバンドエイドを示している…
他者に対する攻撃的な行動/怒る	〈1973. 2. 23〉…ぬいでいたズボンでビシヤリとhを叩いたが…	停滞行動を示すが、他者の声かけにより行動	〈1973. 5. 4〉…泣いて動かない。iが…と声をかけると、…部屋へ…
停滞の自発語	〈1982. 5. 25〉…見に行くと、「○チャン、キライヤ」…	活動的な自発語	〈1985. 10. 1〉…話しかけてくる、「アシタ、オヤスミ?」

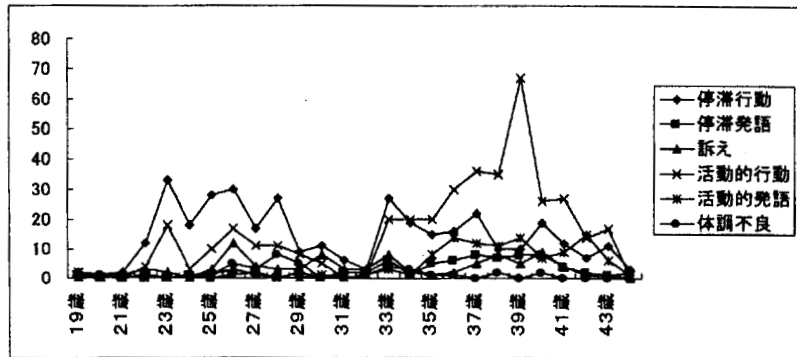


図1 エピソードの項目別個数グラフ

図1によると、32歳（1982年）を一つの大きな節目として、その前後に二つの波型を形成していることが分かる。21歳（1971年）までは生活日誌の記録そのものの数が少なく、変化をとらえることは難しいが、それ以降の時期における変化は波型の変化を示している。徐々に増えていき、ピークを迎えると減少していく傾向にあることがわかる。その二つの波型を形成している内容をみると、32歳（1982年）を境に、活動的行動の数が急増していくのが分かる。自発語も増加傾向をみせ、活動的自発語の方が停滞自発語より増えた。

以上のことから、外形上では一定のリズムを繰り返していき、一つのリズムから次のリズムへの移行には何らかの質的な変化があると考えられる。

2 エピソードにみる発達的な変化

量的な変化がみられたエピソードの内容はどのように発達的な変化をみせているのか、具体的なエピソード⁴⁾をあげつつ、表面上は停滞的なものと活動的なものとして分けられる行動の関連について、明らかにする。

1) 停滞行動

(1) 行動の停止・泣く

停滞行動として最も数も多く、日常的なかかわりを困らせていたのがこれらの行動である。食事や就寝前の時、行動が停止したり、涙を流すことが多くみられ、その対応が模索されていた。

最初は記録者にとって、Tさんの停滞行動の脈絡や原因がわからず、声をかけて行動できるように促していた。声をかけられても次の行動に移ることが難しい場面が多く記録されていた。

：（22歳；1972. 12. 9）…顔を洗いにいくためにタオルを持って、部屋の入口の所で泣き喚く…/（22歳；1972. 12. 11）…声かけたがしばらくじっとしている。そこにmが来て二人で声かけると動いて自分のお部屋にゆく…

次第に、声をかけるのは記録者だけでなく、仲間が声をかけたり、手をひいて目的地までつれていくエピソードが多く記録されていくようになる。時間はかかるが、他者から声をかけられて次の行動へと切り換えられることが増えていくようになっていった。

：（23歳；1973. 5. 4）…トイレの前でシクシク泣いて動かない。iが「Tちゃん、部屋に入りなさい」

と声をかけると、キーキー声を出しながら部屋へ…/ (23歳; 1973. 5. 15) …チャイムで階段までいくが、そこで止まってしまう…玄関までくるが、立ったまま大泣き。…h がそこまでつれてくる…

その後も、脈絡や原因がわからなく、停滞する場所も様々だったのが、25歳(1975年)頃になると同じ停滞行動であっても、他者に訴えていき、受け止められる人、場所へと自ら動く。

：(25歳; 1975. 7. 8) 寝たくない、ホールへ降りてきた…/ (26歳; 1976. 4. 29) 泣いて出てくる。「ネレナイ」と泣いているので、ホールへ布団を運んで寝る…

31歳(1981年)頃に減少していたかと思えた停滞行動が32歳(1982年)を境に増加し始めるが、記録者や仲間とのかかわりの中で、行動を促されている。37歳(1987年)のエピソードからは自分で気持ちを切り替えようとしているかのように、指導員用の宿直室に布団を持って行って寝る姿が記録されている。停滞行動の再増加は自分で切り替えようとしつつも、他者からのかかわりを求めている気持ちの現われと考えられる。

：(32歳; 1982. 9. 11) …食堂へすぐに入らず、o が手を引いていれてくれる。/ (34歳; 1984. 1. 27) …夜お部屋の前に立っている。1時間ほどホールにいて寝る。/ (37歳; 1987. 6. 24) …ホールに座っていたが…12時半以降、宿直室に布団を敷き替え移動していた…

これまでの停滞行動において見られなかった笑顔が39歳(1989年)のエピソードに記録され、他者からのかかわりを待っているようすが伺われる。

：(39歳; 1989. 10. 1) 一人で立っていることが多かったよう(記録者が)声をかけると嬉しそうに笑って…

44歳(1994年)頃になると、停滞行動は量的に減少し、内容的には自分の停滞行動の原因を同年の人に求めるような言動をしている。また、その言動を周りの人、特に年上の人とのかかわりの中で調整している。

：(44歳; 1994. 1. 16) …突然、泣き出す。…聞いて見ると「o チャンが、o チャンが、o チャン、キライ」と言う。…n、o が「o ちゃんは何もしてないのに…」とブツブツと言出す。しばらく泣いていたが、少しして「モウブンブンシマセン。o チャン、ゴメンネ」と謝りました。

停滞行動が完全になくなることはなかったが、常にTさんに声をかけ、受け止めてくれる記録者や年上の仲間がいる中で、徐々に自分を調整し、気持ちを切り替えていくようすが時間的な流れとともに読み取ることができた。同じような停滞行動であっても、32歳を境目としてその前と後では、他者への期待が高まっている。原因は明確でないが、停滞行動は人とかかわりを求めるために現れると思われ、人とかかわりの中で解決されていくものとしてとらえられる。

(2) 攻撃的な行動、怒る

急に人を叩く、人を指差し奇声をあげ怒ったりする他者関係の負の側面である攻撃的な行動が22歳(1972年)の記録から見られ始める。

初めは叩く理由が見当たらず、他者との関係のなかで誘発されたものではなく、関係性のない行動が観察記録された。相手が年上か、同年かに関係なく攻撃的に行動していた。

：(22歳; 1972. 1. 28) …食器洗い中にk の腕にいきなり噛みつく…/ (23歳; 1973. 12. 14) …それから部屋に入って、衣類を出し、そのとき、ht を叩いたらしく、ht が大泣き。/ (25歳; 1975. 6. 2) 「ネムイノニ」と怒って、o を追いかけていた。…/ (29歳; 1979. 12. 9) …食器並べのとき、パンをなげた

り、i さんを叩いたりしたようだ。

理由のない感情的爆発のような行動が33歳(1983年)頃になると、きっかけとなる他者の行動に誘発され、原因となった人につけていくような姿になっていく。

：(33歳;1983. 8. 30) …夜、お風呂でk がギャーギャー言っていたので、ばこっと叩く、(記録者が)叩いたらあかんよ、うるさかったの?ときいたら「ウルサイノ」…/(34歳;1984. 7. 19) …(食事の前に)大きな奇声をあげる…「s さんが自分ばかり(ご飯を)大盛りにしてTちゃんのがなかったからや」と…/(37歳;1987. 5. 31)「メザマシナラナカッタノ」と△△にひっかかっていた(怒っていた)。

さらに、自分のつもりで反していることへの怒りの表現が、38歳(1988年)の終わり頃から、直接に叩くより、言葉による抗議へと変化していく。相手の気持ちを切り替えさせようとする発語も記録されている。そして、自分の行動結果をしっかりとらえ、自分からあやまっていく。

：(38歳;1988. 11. 23) …k のブツブツに対して「モウイイヤン」とか「チョウレイアルヨ、チョウレイ」などとk に対して怒っているのか、文句を連発。/(42歳;1992. 7. 26) 昼食時、ブンブン。…ホールに戻ってくるとニコニコ。「ゴメンネ」と自分からあやまり…

脈絡もなく、感情的に爆発させていたのが、対人的な状況に応じた行動へと変化し、言語的な調節が他者との間でできるようになっている。他者に対する攻撃的な行動はかわりを求めるTさんの要求が負の形で現れたものと考えられ、20代の方向性のない行動から、30代の他者との関係に基づいた行動へと変化することによって、言語的な調整が伴うようになるのであろう。

2) 活動的行動

(1) 手伝い、当番

手伝い行動は他者とのかわりが基本条件であり、当番は集団において決まった約束事である。停滞行動が著しかった20歳(1970年)代、数は少ないが、手伝う姿が記録される。

：(23歳;1973. 6. 8) …声をかけなくても掃除にとりかかる/(26歳;1976. 12. 15) 誕生会後、食器洗いを手伝ってくれる…/(28歳;1978. 2. 20) …机の上のn さんの食事の片付けを黙って(盆を持ち上げたので)しようとしたので「付けてくれるの?」ときくと、「ウン」といって、さっさと洗ってくれる。

33歳(1983年)頃になると、洗濯は当番としてやり通すだけでなく、当番でない時、自分で状況把握して進んで手伝いをしている。手伝いした事にたいして、周りの人からの感謝に喜ぶ。

：(33歳;1983. 10. 16) 職員の洗濯がほってあったのを洗濯機をまわしにいく。…/(34歳;1984. 8. 9) お昼休み、洗濯していると自分から手伝ってくれる/(36歳;1986. 6. 17) 洗濯当番、…もう9時になるから止めていいと言っても、黙々と最後まできっちりとする。おやつも食べずに…/(36歳;1986. 7. 2) …昼食、…湯のみとお箸を配ってねとやってもらい…、食事中にテーブルの人達に、Tちゃんにやってもらったの、ありがとうとお礼を言いました。Tちゃん、とっても喜んでくれました。…

決まったポスト、一つの当番の役割に終わらず、次々と積極的に手伝う場所を見つけていく。他の人がするだろうと予想できる行動に進んでいく。

：(38歳;1988. 5. 31) 食器洗い当番で洗いが早く終わると、他の所にすっとまわり、手伝っている。終わってない所へ、次々と応援にいく…/(42歳;1992. 5. 6) もうすぐ夕食という頃、o さんの昼食の時のやかんとコップを台所へ、さっと運んでいる。

決まった範囲内のことから自分で状況判断し、進んでするように変化している。これは周りの

人の動きをとらえることによって、可能になる行動であり、他者から評価された自分を経験したことによって、このような行動が促されていくと考えられる。

(2) 他者への働きかけ行動

伝達のような状況の必然性に応じてではなく、他者へと気持ちを向けていくようになる行動の変化は、停滞行動が著しかった20代頃にはほとんど記録されなかった。26歳(1976年)のエピソードに自分から話かけてくる姿があるが、脈絡なく他者へ働きかけるものとして次への展開は難しいものであった。

：(26歳;1976.10.5)…ホールに座っていたが、(側に座った記録者に)突然「ブタミテキタノ」と言っていた。

約10年の時間をかけて、35歳(1985年)頃になると、会話のきっかけを自分から作る姿がみられ、人とかかわりたい、話しの輪に参加していきたい内面的な変化をうかがわせるエピソードが多くみられるようになる。

：(35歳;1985.3.9)…私の筆箱をみて「□□センセイノ?」とはっきり名前まで言いました…/(35歳;1985.4.30)…「コレヤッテ」と随分前にけがした指のバンドエイドを示している…/(36歳;1986.2.16)…宿直室にいる職員のところにわざわざ来て「オワッタ」という。「え?」というと「トウバンオワッタ」ということだ…/(36歳;1986.6.15)…(他の仲間と記録者が話していると、会話に入ってきた、Tは別の話を楽しそうに話していた…

次第に、会話のきっかけを作ったり、意図する活動への助けとして他者を求めていく姿や他者を状況によって動かしていったり、自分の活動へ人を招き入れる姿がみられるようになる。

：(37歳;1987.1.18)食器洗いから帰ってくると、便箋もって「センセイ、カイト」と言いに来る。いつもならこちらが声かけして手紙を書くパターンだったが…/(37歳;1987.2.21)…3時のチャイムがなると、「hサン、ナッタヨ」と言っている。また、耳掃除を順番にしていって、htさんに…尋ねると、何も答えないhtさんに「ミミ、ミミ」と教えてあげている。/(37歳;1987.11.4)掃除中、itさんに「itチャン、オヤチュミ?」、「うん」、「アチタハ?」と聞いている。誰もitさんに声をかけないので、いつも耳にしている言葉を自分から言ったのだろう。/(38歳;1988.1.19)目覚まし時計をさしだし、「コレヤッテチョウダイ」とはっきり言う。…昼、パズルやってもいいと言ってくれる…/(40歳;1990.3.3)「○○せんせい、hチャン、マッテルヨ」、「○○センセイ、oチャン」など、歯磨の用意を持ってきた人のかわりに声をかけてくれる。

そして、積極的に人を招き入れ、関わっていくようになると、自分の行動を客観的にとらえていられると思われる発言をして、他者とかかわっていく。

：(42歳;1992.9.17)歯磨の時、(記録者にいきなり「ブンブンシテゴメンネ」といってくる…/(43歳;1993.12.21)食器洗いの時、/キョウウ、ブンブンシテナイヨ」と言ってくる。突然だったのでびっくりした。「ブンブンしてないの、えらいわー」「ウン、シテナイ」

日常的な生活場面において、周囲の状況や関わり方から、状況の読み取り方や人とかかわり方を学んでいったことがうかがわれる。20代頃の初めての自発的な働きかけから、10年もの時間をかけて自発的な働きかけの方法を獲得していった。そうして、積極的なかかわり方ができいくと、自分の行動についての客観的な捉え方ができていき、自分と他者とかかわりだけでなく、

他者と他者をつなぐ存在としての姿へと発達していくと考えられる。

(3) 仲間関係

人とのかかわり方が変化していく中で、他の仲間との関係はどのように変化していたか、エピソードをとりだしてみた。32歳(1982年)までの記録の中には、年上の人から援助される立場として、レコードなど難しい操作のものはやってもらう事がほとんどだった。同年のhさんにたいしては、おやつを渡してあげたり、いっしょに行動しようとする姿がみられた。

：(23歳;1973. 3. 12) …汚れたものをh k が世話して洗っていた。/(23歳;1973. 5. 24) …h ちゃんに…と声がけすると、「h チャン、h チャン」と言って、トイレを指差して自分も中に入って行った。しばらく黙っていたら二人ともニコニコしながら手をつないでできた。/(25歳;1975. 9. 1) …s と二人でれんげの部屋でレコード鑑賞/(27歳;1977. 2. 28) 掃除の時はh と仲良く、草履並べをしていてくれたりしていたが…/(27歳;1977. 11. 8) おやつの時、h にお茶をあげたり、飴をあげて世話している。/(29歳;1979. 10. 2) ヒステリーを起こすこともあるが、食事の時もご飯をよそったり、今日はi のズボンからシャツが出ているのをいれてやったりしていた。

援助される立場にあることには変わりなかったが、37歳(1987年)になると、年下の人への援助をする場面がみられ、援助される場合でも自分から人に頼む姿が記録されるようになる。また、それまで援助してくれていた人に対しても支える気持ちをむける姿がみられるようになる。

：(36歳;1986. 4. 20) …二階のたんぼの部屋でw らとカセットを聴いていた…/(37歳;1987. 8. 5) 「sy ちゃんのことお願いね」と昨夜から何度か言って見る。朝起きて、洗面にいくのに「カオアラオウ!」とsy ちゃんの手を引いていく…/(37歳;1987. 11. 6) h をみかねて、湯のみにお茶を入れて持ってきてあげている…/(38歳;1988. 8. 5) …PM9時前に、何も言わずともさっとsy ちゃんの手をひいてお部屋へ…/(39歳;1989. 4. 19) 「h m サン、カミカワカシテ」と自分からお願いしていた。…(39歳;1989. 6. 4) 髪を乾かしていないsy ちゃんの姿を見つけ「sy チャン、オイデ」といって、ドライヤーをかけてあげている。/(41歳;1991. 2. 2) …夜の歯磨はw さんに、薬つけはi k さんに頼んでいました。/(41歳;1991. 3. 13) k b さんが夜中に咳込んでいると、背中をさすってあげているらしい。

他者とのかかわり方が年上の人との場合では、援助される一方的なものから、支える気持ちをむける相互的なもの、そして、援助が必要だと判断される場面に限る選択的なものへと変化している。また、同年の人については、停滞行動が多かった20歳代から、日常的な行動の中で、援助しあう関係というより、楽しみあう存在としての関係が作られている。年下の人との関係については、活動的な行動が増加した32歳頃以降の時期において、積極的に援助していく立場をとっている。これらのことから、同年の人との関係が早くから相互的な面をみせていることに対して、年上や年下の人との関係は、援助される経験の積み重ねによって変化していくと考えられる。

(4) その他

かかわりに対する拒否や意思を通そうとするエピソードを分類してみた。拒否のエピソードは日常生活場面において、停滞行動として捉えられやすい行動と考えられるが、意思表示することが行動を勧めていくことや、他者との関わりが前提であるため、他者との関係調節に深く関連していると考えられる。拒否のエピソードは32歳(1982年)までに1度記録されているのみである。

：(23歳;1973. 11. 16)で残業をみんなで一緒にやるということで、(周りの人が残業に出かけるとき)おはじきをして遊んでいる。「行かないの」というと「イカナイノ」という。…

33歳(1983年)に入ると、拒否する姿が多く記録されるようになり、自分のやりたいことをしたい、これは自分の物だと言わなければならない行動をみせるようになっていく。

：(33歳;1983. 10. 16)…今日はパズルしていず、ずーと暇そうにしている。「パズルしないの?」ときくと「ウン」。しばらくしてノートを持ってきて「r」の字をいっぱい書き始める…/(33歳;1983. 10. 27)

お風呂で頭を洗ってあげよと言っても顔を横にふって洗わず、いつもは洗ってというのだが/(34歳;1984. 11. 18)…「Tちゃん、頭洗おうか」と言っても要らんと首を振る…/(35歳;1985. 10. 13)買い物してきたトレーナーなどに名前つけをしていると側にきて「Tチャンノ」といって指差す…

意思を通そうとする姿が記録されてから、積極的な行動がみられるようになり、意思をはっきりと伝えるようになっていく。

：(36歳;1986. 5. 23)…◇◇先生宅に行きたい人を聞いていると、突然大きな声で「ハイ、ワタシ」と手をあげていう…/(37歳;1987. 3. 27)帰省の用意をしていると、側でみていて「スカートとズボンのどっち?」と聞くと「ズボン」。「春だから暑いよ」というと、「アツナイ、ズボンガイイ」と言い切る…/(39歳;1989. 3. 11)…運動靴を手にして「Tちゃん、体育館にいくときに持っていたら? お部屋に持っていくの? まとめてここに置いておいたらいいじゃない?」「オヘヤニモツテイクノ」。

自分の意思を通していくと、他者の状況も理解して受け止めようとするかのように他者に対して言葉をかけていく変化をみせる。

：(40歳;1990. 1. 16)夕食時、おかずが足りないと言ったのを見て「ゴメン、タリナカッタネ。ゴメン」と言ってくれました。びっくりしました。

他者との関係変化の中で、他者からの一方的なかかわりに従うだけでなく、拒否の反応であっても、自分の気持ちをくぐらせた選択する反応を返していくようになることによって、他者の置かれた状況を理解したとき、その気持ちをくみ取った関わり方ができていったと考えられる。

3) 訴え

行動の切り替えができない停滞してしまった時に、理由づけできず、身体的な苦痛を訴えていたのが、身体的な苦痛であっても、それを具体的に解決する方法を示しながら訴えていったり、他者との直接的な関わりをもつような訴えに変っていく。

：(22歳;1972. 9. 30)…ねむい、ねむいと言ったって、頭とお腹をおさえて…/(26歳;1976. 1. 31)…ヒステリーをおこし、「アタマガイタイ」と泣いていたが、しばらくするとおさまった。/(30歳;1980. 6. 24)…歯磨粉がないと泣いているが…次はしんどいと言ってくる…/(30歳;1990. 7. 2)…就寝前、パズルの箱を持ってウロウロ。どうしたのかな?と思っていたら、突然「〇〇ナイ」と言い出す。パズルの箱にいれて満足そうに寝る。

原因がはっきりしない、行動が停滞する場面においてよくみられた訴えは、適切な要求の手段を持ち、状況把握ができるまでの間、人とのかかわりを求めている現われだったと考えられる。

考 察

1 停滞行動と活動的行動の関連

日常的な場面において、停滞行動は集団の流れを妨害する問題行動としてとらえられることが多いだろう。常に、一対一の対応をしていくことは、集団生活の形態上、生活を支える人材や時間などの様々な面において難しい。

はじめ、要求を表現する適切な手段を持ちえなかった T さんは、自分の要求を表現して解決することができずにいたと考えられる。生活のながれを分かって行動することができていたにもかかわらず、場面に入れないことが増えていく。そこで、周りの人は場面ごとに声をかけていき、行動を促していく。停滞行動の度に、他者とのかかわりの度が増加する。停滞行動の中で受け止められた経験を積み重ねていき、自分の行動への意味づけや切り替えの仕方を教えられ調整していく。量的な積み重ねによって、教えられた仕方は他の人の場合でも、同じようにかかわっていけるように行動を客観的にとらえることができるようになっていく。また、数少ないが、周りを意識していると思われる初期の活動的行動から、守るべき当番や手伝いのように、周囲の人と同じことをやりたい気持ちが育ちつつあったことがうかがえる。

このようにして、停滞行動は活動的行動へと変化していき、停滞行動の改善だけでなく、他者への積極的なかかわりとして現われていくのである。また、停滞行動の増加時期に活動的行動があらわれ始めていたこと、減少していった停滞行動の再増加時期から活動的行動が時期を同じにして急増し始めたことから、行動のプラスの局面とマイナスの局面はどちらかが一方的に現われるのではなく、同時に現われ、マイナスの局面が他者とのかかわりの中で質的に変化していくと、プラスの局面が現著にその姿をみえるようになると言える。発達の矛盾した状況が T さんの中で作られていたと考えられる。停滞行動は集団生活における単なる負の行動でなく、T さんの発達の要求の日常的な現われとして、長期的かつ発達の視点でとらえなければならない。

2 人とのかかわりにみる集団作り

停滞行動は人とのかかわりの中で変化していき、活動的行動はよりよい自発的、相互的、選択的な他者との関係へと発達していく。人とのかかわり方は一方向的なものから相互的なものへと発達していき、多方向へと相互的なかかわりが持てるようになっていく。T さんの生活記録から読み取れた変化は、生活指導員とのかかわりの中で、直接的な生活援助、指導をうけたことだけによって現れたのではない。指導員がいない所での仲間とのかかわり、そして、そのようなかかわりを促す指導の方法によって促されたものと言える。言い換えれば、指導員だけでなく、仲間との関係を意図的に組織化していくことが求められるのである。

T さんは援助され、声をかけられる立場から、援助しようとする立場へと変わっていった。これはただ集団生活をしているから可能となることではない。T さんのような発達の变化を成し遂げるためには、発達年齢的にも生活年齢的にも、異年齢の人に構成された集団であることが求められる。停滞行動は年上の人達によって、緩和される方向へと導かれ行き、活動的行動がもっとも多く記録された 38 歳(1988 年)頃に入寮した年下の人を積極的に援助していた。自分が援助された経験や受け入れられてた経験が、援助する立場になったときに活用されていたのである。

そのような行動ができるためには、発達的に様々な領域において力を獲得していたことがその前提にあるが、ここで注目すべきことは人とのかかわり方については経験なしで、獲得できるのではないことである。学んだことは実際に実践できる機会があればこそ、我がものとなっていく。教え合える立場が流動的かつ多方向的なものであり、その結果についての客観的な方向からの評価がなされる集団作りが望まれる。

3 生活指導への示唆

成人発達障害者の場合、発達的な変化がみえにくく、毎日の対応に追われることが現実であろう。長期的な見通しでみていく必要性は言われているが、その変化を日常生活の中でとらえて評価していくことは難しい。そのためには、本稿に使われた生活記録のように、毎日の特記すべき行動の変化についての記録が必要である。長期的な見通しをもって、一定期間を区切って変化をふり返り、再評価することによって、次の指導への着眼点が定まっていくであろう。

本稿からの生活指導への示唆は次の二点を強調しておきたい。第一に、精神的な安定を支える指導である。日常的な指導上、他者に対する攻撃的な行動に比べると、身体的な苦痛を訴える場面のように、病的な原因が明らかでない時は、単なるあまえとみなされ、対応されないか聞き流されることが多いかも知れない。しかし、あまえだとしても、それは他者からのかかわりを求める姿であり、しっかり受け止められることによって、次の活動へと進むことができるよう、時には心の安全基地としての役割を担ってあげる存在が必要であろう。

第二に、当番や手伝いのような活動を中心に、生活の中で他者から評価される経験を設定していく。当番は行う内容がはっきりし、集団において必要な活動であるため、活動の結果が集団の中に位置づけられて評価される。また、複数の人と関わる中で進めていく活動が多いので、評価される仲間を見る機会となる。手伝いの場合は求められて手伝い、評価される仲間をみることで、自らも求められて手伝い、評価される経験を積み重ねることにつながり、進んで状況判断して手伝うようになるのである。

話し言葉の少ないTさんの活動結果は記録者達によって、意図的かつ丁寧に他者から評価されるように導かれていた。ここで、忘れてならないことは評価されるきっかけとして当番や手伝いを生活の中に組織していき、指導員が活動結果を評価し、意味づけていくことが仲間からの評価を引き出す前提となることである。

4 方法論上の検討

複数の記録者の中で、決められた観察記録の一貫した視点を話しあっていたとは考えにくい。記録の活用状況や記録内容から、記録順の後者は前者の視点に影響されつつ、対象者の行動をとらえて記録していた。また、決まった生活の流れに沿わない行動や他者との間で起こる負の行動は、最もよく観察されたエピソードであった。手伝いなどの活動的行動は対象者を集団の中で評価し、仲間との間で認められ、位置づけていく材料として中点を置かれていた。

また、24年間の行動を停滞行動と活動的行動に分類して検討した結果、日常的な行動の個数が波形をつくり変化し、発生、発展、消滅するとともに、新たな質のものが発生するといった変化のリズムをくりかえしているのとらえることができた。

以上のことから、複数の記録者による生活記録を研究資料にし、対象者の生活における発達的な変化をとらえようとした本稿の研究方法は、記録の類似した視点、エピソードの最的な変化にみられた一定のリズムや内容の質的な変化をとらえる上で有効であったと言える。

5 今後の課題

日常的な行動の発達的な変化について、発達の領域全般についての確認と日常行動の変化との照らし合わせが求められる。発達的な視点における根拠づけ、そして、本稿の対象時期以降の変化リズムを確認考察することが今後の課題となる。

註

- 1) 知的障害者の居住型生活施設は更生施設と授産施設があり、1997年現在、全国に1,390ヵ所ある。
- 2) 反響言語が表出言語の大半を示していたため、自閉症ではないかと言われていたが、判断基準となる強いこだわりや対人関係に問題をもっていたことは記録されず、生育歴や生活記録から自閉症ではないと判断した。反響言語は自閉症によるものではなく、発達の幼さによるものと考えられる。
- 3) 年間を通して、正月、お盆、年度末の帰省があり、その他に、短期帰省が時々行われる。
- 4) エピソード引用の際、職員は図形(△, ▲など)、仲間は英文字の小文字で表記した。仲間の年上の人にアンダーラインをつけ、年下の人は強調文字を使用した。また、前後の状況を明確にするために、必要と判断したところには筆者が()内に説明を加えた。
- 5) 書き言葉を持たない人のために、指導員がその日の出来事を聴取し、それを点線で書いたもの。点線に沿って、Tさんは文字をなぞる。書き言葉が未獲得な場合も、他の仲間と同じことがしたい気持ちを持って、その日の出来事を指導員とふり返る時間をもつために取り組まれてきた。

引用文献

- 日本知的障害福祉連盟(編)1999 発達障害白書2000 日本文化科学社 p.281
戸田順子 1994 グループホーム、における生活援助 障害者問題研究 no.79 vol.22 p.30-37
近藤郁夫 1989 教育・集団・人格発達 集団と人格発達 全国障害者問題研究会出版部 p.55
秦安雄 1995 精神薄弱者援護施設入所者の高齢化の実態と施設ケアの問題(1)
日本福祉大学研究紀要第92号 第1分冊～福祉領域 p.216-202
長谷川桜子・池田由紀江・蒲生恵・梅谷忠勇・堅田明義 2000 施設に居住する知的障害者における要介助度の加齢的变化―更生施設における10年間の日誌の分析― 心身障害学研究第24巻筑波大学心身障害学系 p.219-225
石原繁野 1963 あざみ寮報告書1 財団法人大木会あざみ寮
やまだようこ 1987 ことばの前のことば―ことばが生まれるすじみち1 新曜社
松田千都 2000 対人関係に難しさをもつ発達遅滞児の他者認識の発達と療育
「SNEジャーナル」第5巻 特別なニーズ教育とインテグレーション学会
張貞京 1993 障害者の生活認識の発達の検討 京都入学大学院教育学研究科修士論文

(博士後期課程5回生、教育方法学講座)